

置ク可シ

ダーヒツツへ釣置時之心得

一諸端舟ハ釣上ケサル以前ニ定リタル置場へ其附属品ヲ置キ而シテ后之ヲ釣上クヘシ

一カノツトヲ釣ルニハ圖ノ如ク上下ノプロツク切着スルヲ要スヘシ而シテ釣上ケタルカノツトニハ舵ヲ附置ヘカラス之ヲ内へ取入置キ且抜穴之栓ハ取外シ置ヘシ

バツクスピール(ダーゴン)ニ繫置時之規定

一凡カノツトハ各釣置可キ方之バツクスピールニ繫キ置ク
一ヲ要ス

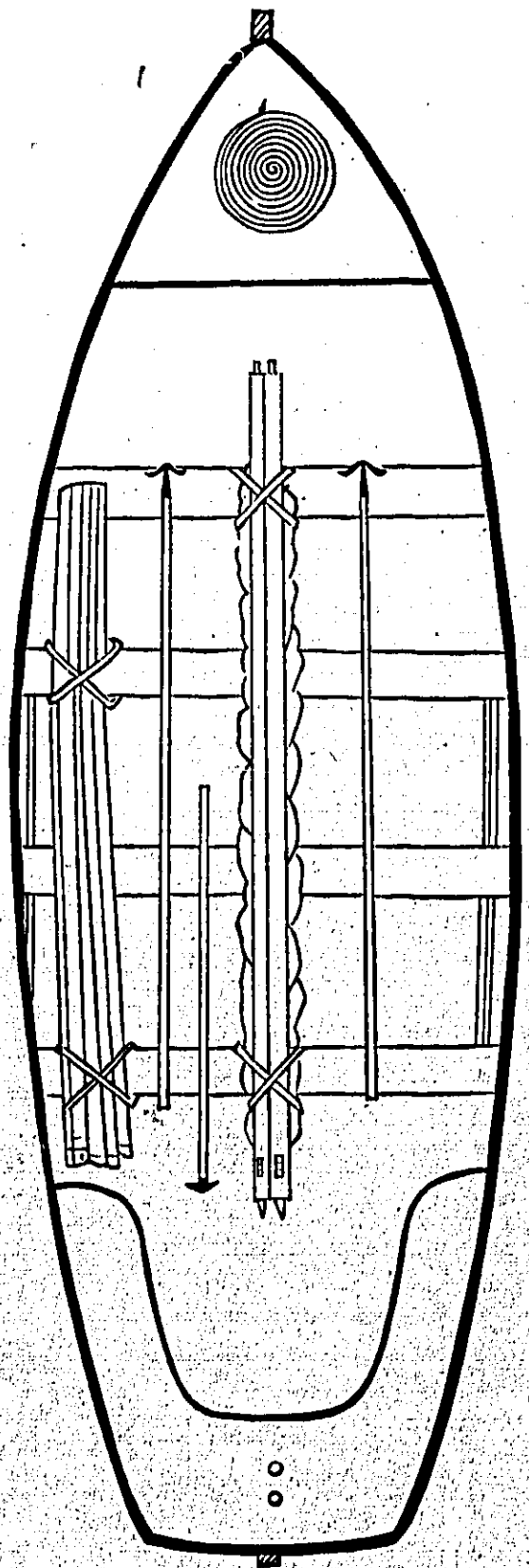
一カノツト之繫索ハバツクスピールニ下リタル綱へ通シ之ヲ折返シ來リテ其カノツト中ニハ之ヲ留置クヘシ且爰ニ繫ク時ハ其楫ヲハ舟中ニ取入レ置ヘシ



一バツクスピールニ繫置時其フヲフハ祝自又ハ休日ナラテハ立サルナリ

一爰ニ繫置ニモ其附属品ハ右規定之通り夫ヤノ場所へ居置ヘシ

一時化之節ハ舳の方へ之ヲ繫キ置クヘシ尤繫キ方ハダーゴンニ於ケル時ノ如シ



カノツトヲ出ス時之心得

一カノツト之乗組手ハ兼テ能ク之ヲ點檢シ其入用丈ケ之人員ヲ極メ置ヘシ而シテ其他一人之小頭ヲモ定メ置クヲ要ス

一イヨル及ヒバレニエル之小頭ハ其尤モ舳之方ニテリメ
 ンヲ使用スルコトヲ司ルヘシ若シ乗組士官アラサル時ハ此

者リ—メンヲ止メ楫ヲ取ルコトヲ司ル可シ

一此乗組手ハ何レモ一様ナル衣服ヲ着シ且奇麗ニアル可キナリ

一端舟之乗組手ハ言語ヲ堅禁シ尤モ笑フコト無カル可シ

一帆走セントスル時ハ其リ—メンヲ悉ク其置場所ニ結付且其乗組手ハ各之居場所ニ在リテ前後混亂スヘカラス

一帆走ヲ止リ—メンヲ以テ走ラント欲スル時ハ能ク其帆ヲ縮收シ而シテ櫓ト共ニ之ヲ其置場所ニ結付ヘシ然ルキハ舳之方ヘ旗ヲ立ツ可キナリ

一帆走スル時ハ舳ノ旗ヲ去リ帆ニ付タル旗ノミヲ用ユル事

一端舟ヲ出ス時其小頭ハ能注意シテ船外ヘ物之亂出セサル様致スヘシ

一當番士官之命令ヲ以テ或ルカノツト用意之事ヲ當番小頭
ニ告ルヤ否ヤ其小頭ハ水夫部屋入口之邊ニ至リテ其カノ
ツト之號笛ヲ吹キ其乗組手ヲ呼出スヘシ必シモ言語ヲ以
テスルヲ勿ルヘシ乗組手其號笛ヲ聞クヤ否ヤ直ニ何事ヲ
モ手放シ其カノツトヘ乗組ヘシ
一カノツトバツクスピールニ繫キアル時ハ其乗組手バツク
スピールヲ傳ヘテ之ヲ乗移リ當番士官之命ニ從ヒ右舷或
ハ左舷階下ニ之ヲ乘廻スヘシ
一カノツトヲダ―ヒツツヘ釣リ上ル時ハ先ツ其以前ニ能ク
カノツト中之諸品ヲ其置場所ニ收メ而后之ヲ釣上クヘシ
此時小頭并外一人舟中ニ在リテカノツト共ニ釣リ上ラ
ル、ヤ之ヲ釣上ルニハ此乗組手ノミヲ以テシテ他之カノ

チ―ヤ之手ヲ借ルヲ無ル可シ
一或ルカノツト己レ之用向ヲ達シテ本船ヘ歸リタル時ハ之
ヲ舷桁ヘ廻シ其乗組人都テノ附屬品ヲ夫々之置場所ヘ仕
舞ヒ其後何レモ其舷桁ヲ傳ハリテ艦内ヘ立戻ルヘシ
一カノツトヲ釣揚ントスル時ハ當番士官之命令ニ由テ當番
小頭其號笛ヲ吹キ之ヲ其乗組手ニ知ラスヘシ然ル時ハ其
カノツト之小頭并外一人ダ―ゴンヨリ傳ハリテカノツト
ニ乗移リ之ヲ廻シ來リテ釣綱之ハ―カプロツクヘ之ヲ引
掛クヘシ其餘ノ掛リカノチ―ルハ甲板上ニ在テ之ヲ釣上
ル用意ナスヘシ

端舟小頭之心得

一各舟之小頭ハ能ヤ我カ掛リ之カノツトニ心附且都テ之務
向ニ於テ能差圖スルヲ要スヘシ

一カノツト之各之小頭ハ能ヤ心附ケ富士山之甲比丹在船中
ハ可成丈ケヨキ働キ有ル者ヲ以テ其乗組手ニ定メ置サレ
ハアル可カラス

一其小頭ハ兼テ定メ有ル乗組手ヲ點檢シテ日々能ク其充缺
ヲ改メ視テ若シ乗組人病氣等ニテ不足ナル時ハ他之人員
ヲ以テ之ヲ充シメ其番號等誌シ置ク心得有ル可キナリ

一其小頭ハ能ヤ注意シテカノツト之諸艦ヘ近ツク時其附ケ
方最モ龜忽無キ様致スヘシ

一其小頭ハ注意シテ舳ノ船子ニハ利發之者ヲ撰ミ置以テ鍵
棒ヲ使用セシムヘシ亦艦之方ヘハ可成丈ケリレメン之達

者ヲ撰ミ置クヘキナリ

一毎朝カノツト之洗拂且磨物等本船之洗磨ト同シ時限迄ニ
共ニ卒業セシメ而シテ此時ニ其附屬品之破損缺乏等ヲ小
頭之者點檢シ若シ缺損アレハ之ヲ小林文次郎ヘ暢達シ其
補償ヲ求ム可キナリ

一各舟乗組手之位地ハ一定セシメテ錯亂ス可ラス若病者等
アリテ代ヲ出ス時ハ其者共病者之定位ニ從行ス可シ

一各舟乗組手リーメンヲ使用スル事ハ尤モ前ヘ手ヲ延シ可
成丈ケカヲ出シ而シテ其リーメン水上ヨリモ水中ニ久ク
住マリテ能ク其リーメン之働キヲ多クセシム可キナリ

端舟中ニテ挨拶之心得

一カノツト若シ他之カノツトト出逢フ時其フヲフ或ハ其様

子等ニテ彼方ニ重立タル者乗組マル、ト見受シ時ニハ決シテ其船之舳ノ方ヲ遮リ通航スヘカラス

一若シ重立タル者ニ出逢フ時ハ左之恭禮ヲ行フ可シ

一リ―メンニテ走リアル時ハ之ヲ使用スルヲ止メ、ヲツプ
リ―メン爲シ而シテ舳之方ニ在ル人挨拶ヲ爲ス可シ

二帆走シテ在ル時ニハスコ―トヲ解緩シ而シテ舳方ニ在
ル人挨拶ヲナスヘシ

一若シカノツト或ル軍艦へ行キタル時久ク其階下ヘカノツ

トヲ置ヘカラス待合スル時間久キ時ニハ其本船ヲ少シク
遠サケ漂ヒ有ルヘキナリ或ハ又彼舷桁オウギ之下ニ在ルヘシ而
シテ其端舟手ハ彼ノ本船ヨリ許ルシヲ受ケスシテ猥リニ
艦内へ乗入ヘカラス縦令許容アルトモ端舟中一人モ殘ル

ト無ク登艦スルト有ルヘカラス

端船へ乗組之規定

一向後毎日端舟へ乗組之者ヲ揃ヘ其不足之者ヲ足スニハ人
數改畢テ後當番士官高聲ニテ左之號令ヲ掛ケ以テ其不足
ヲ滿スヘシ

端舟掛リ揃ヘ

一右之號令ニ因テ當番小頭水夫部屋入口上ニ於テ其號笛ヲ
吹キ此號令ヲ再告スヘシ

一此號笛ヲ聞カハカノチ―ルハ直チニ彼頭ト共ニ掛リ端舟
ノ側ニ列スヘシ

一其時當日之乗組手不足之節ハ其頭ハ其代リヲ滿シ其不足

ナキ一并其端舟ニ附属シタル品ノ損欠ヲ小林氏へ告へシ
 一其後當番士官ヨリ端舟へ乗組へキ令ヲ掛タル時ハ當番小
 頭笛ヲ吹キ直チニ掛リヤ々之端舟へ乗組スヘシ
 此佗號令ニ係ル分ハ都テ省之

富士山艦内水火夫組分表

組番三		組番壹	
七番砲手介	五番砲手介	七番砲手長	三番砲手長
一三番砲手介	五番砲手手	一三番砲手長	三番砲手手
リ掛舟端番三		リ掛舟端番一	
一五七	一五七	一五七	一五七
十兩	十兩	十兩	十兩
常久助	太七助	初五助	重七助
組番四		組番貳	
六番砲手介	四番砲手手	六番砲手手	四番砲手手
二番砲手手	六番砲手手	二番砲手手	六番砲手手
リ掛舟端番四		リ掛舟端番二	
一五八	一五八	一五八	一五八
十兩	十兩	十兩	十兩
三健五郎	菊之助	幸三助	金四郎

三十		組番一十			組番九			組番七			組番五		
鍛冶火焚	鍛冶火焚	帆工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	
六〇七	六〇七	九〇七	九〇七	九〇七	九〇七	九〇七	九〇七	九〇七	九〇七	九〇七	九〇七	九〇七	
二十兩	二十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	
延吉	德松	宗次郎	金藏	定兵衛	平吉	仙助	松太郎	吉五郎	竹藏	助次郎	岩松	榮吉	
四十		組番二十			組番十			組番八			組番六		
鍛冶火焚	鍛冶火焚	帆工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	
六〇八	六〇八	九〇八	九〇八	九〇八	九〇八	九〇八	九〇八	九〇八	九〇八	九〇八	九〇八	九〇八	
二十兩	二十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	十兩	
國藏	森藏	新藏	鐵五郎	喜太郎	茂右衛門	初右衛門	實利吉	彦介	久米吉	政次郎	長平助	周助	

生徒修業時限

日課

日本士官教導ノ仕様

朝陽艦ヲ稽古船ト定ム

教師陳述數條

教師謁見

局外中立

教師解約ヲ諾ス

海軍歴史卷之十九

英國教師海軍傳習

慶應二丙寅年我大阪ニ滞在セシ年九月突然命アリ上京
 ス命ヲ奉シテ長州ニ使ス即チ藝州廣島ニ向ケ出立シ嚴島ニ
 入り此月其事終テ京師ニ歸ル我カ進退建言大ニ旨ニ違フ京
 師ヲ辭シ去リテ江戸ニ歸リ海軍ニ從事ス從是先キ幕府英國
 ニ依頼シ海軍傳習之舉有リ夫レ此傳習之事タルヤ英佛蘭等
 各國何レモ彼ニ長スル所アルモ此ニ短ナル所有ルカ如ク其
 技藝ニ因リ互ニ所長アリ故ニ大約大同小異ニシテ其得失之
 差アルヲ視ス此術ヲ學フ者ノ速カニ卒業之効ヲ得ルハ特ニ
 教師タル者ノ誘掖懇切ナルト生徒タル者ノ勤學勉勵ナルト

ニ在ル而已焉ソ執レヲカ是トシ執レヲカ非トセン曾テ陸海兩軍之術共傳習ハ都テ佛國人ヘ托ス可キノ約ニ在リシ處同國公使ヨリ向後海軍術ノ教授ニ至リテハ英國ヘ倚頼シテ然ル可シトノ諭告ニ由リ英國公使ヘ左之受傳手續書ヲ達スルニ到リシ但是ハ同年七八月之交ヒ閣老ヨリ書翰添ヘ送付セシモノナリ其文ニ云

海軍術傳習受候手續

一日本海軍之儀者先年於長崎荷蘭人ヨリ傳習を受け測量算術船具運用蒸氣機關等之科學ハ畧々會得ハズ航海術ニ於テハ深く差支候義も無之候得共何分半途ふして相廢レ遂ニ其蓋奥を究めざりしによりて既ニ本年之初より再ハ佛郎西人ト相頼ミ船上之諸則大砲之使用等傳習ハズ

故ニ先ツ歐羅巴各國海軍之制度も其概畧ハ解セしうとも戦法軍律ニ至りては一船之掛引も未タ精熟之場合ニ至らば候間右等之處今一層研究を遂げ速ニ實地應用ニ堪候様ハ度存候ニ付此度海軍術傳習貴國ト相頼候上者凡右之目的を以て教導之順序被相立候様致し度候事

一海軍術傳習之儀ハ貴國政府ニ而承引ありし上ふて治定有之事と存候教師ハ其本國より被相招候とも又ハ我國ニ在留有之候士官之中ニ而も總而左之學科之者相頼度候事

- 一「タクチーキ」ニ長シ戦争實地を経る老練之士官 一人
- 一海軍諸則并運用測量を兼たる士官 一人
- 一砲術ニ長したる士官 一人
- 一蒸氣方士官 一人

一 算術ニ長シタル海軍勘定役

一人

但 語學を兼たる者

下等士官

一 ポーツマン水夫小頭

一人

一 大砲方

二人

一 上等水夫

三人

一 音號を司る喇叭手鼓手之類

三人

右給料之儀者貴國ニ而被相定候様ニ依リ度存候尤是迄佛蘭西人之海軍教師々ハ士官一人一ヶ月三百弗ツ、下等士官一人同斷六十弗ツ、或者四十弗ツ、相渡シ候事ニ有之候

一 學徒ハ英佛荷蘭三國之内語學或ハ海軍諸術之内心得居候

者而已相撰み傳習可申付候事

一 傳習ニ依リ候場所ハ船中ニ有之候方學術研究之一助ニも可相成且ハ生年之者游惰ニ流れざる様取締筋も行届可申候ニ付觀光ト相唱候軍艦并外船々之内横濱港内ニ碇泊ニ依リ置學徒ハ常ニ右船中ニ寄宿爲致置日々時限を定て傳習ニ依リ可申候事

一 教師ハ陸上ニ住居ニ依リ被居日々右船上ニ出張教導有之候様ニ依リ度候事

此海軍傳習中執扱之記事多少他ノ聞見ニ隨フ者有りと雖モ多くハ我々當時之日記より抜抄して茲ニ其概要を摘記ス

同三丁卯年二月四日英國ニ於テ海軍術兼備セシ者ヲ撰擇シ
 爲海軍傳習此地へ渡來ス可キ者四名既ニ本國ヲ發セシ旨全
 國公使パークスヨリ參政大關肥後守へ面話アリ同年三月五
 日我海軍傳習掛命セラレ其事ヲ執ヲ令メラレタリ同月七日
 海軍傳習之事ニ付英國公使パークスニ應接ス此頃同人上坂
 スル由明日神奈川迄出張ト云
 右命ヲ受ケシニ因リ我カ意見ヲ左ノ如ク建言ス
 一英人申出候此度之教師コモドール之官御任之儀ハ當御地
 ニ而シ御異存無之乍去其事兩國之大事ニ關係いたし居候
 義ふ付一應京師へ御伺之上御挨拶可有之旨御答之事
 一金川表ハ帆前船差置コモドール之旗章揚置他之御船ハ右
 之令下ニ應候事ハ前件御許容之上御取極之事

但他之御船ハ教示ふ隨ひ進退いたし候事ハ既ニ教師
 之名目有之候上シ諸規則并業前運轉等相拒ヒ候譯ニ
 も有之間敷皆一同其教示ヲ奉候事ト存候
 一乗組傳習生ハ此度新ニ御募相成候者共年少ニ而是ト計ふ
 テ如何とも帆前ハ運轉いたし難く候間從來之軍艦役并
 組之内より人撰傳習被仰付右ハ屬し新生徒乗組教授受候
 方歟下等士官并水夫も人撰相當之人數爲乗組候御心得之
 事
 尤公使歸府後之模様ニ寄り右等人撰人配等取調可申
 事

一舊海軍局之教授ハ教師來着之上爰ニ居附候教官指揮い
 候哉來着之上ならてハ分明あらヒ候間若し萬一右様相

成候ハ、新生徒被仰付候方哉と存候或ハ英語下稽古等相
始め置キ可然哉一應英人へ承合篤と御相談之上御取極之
事

一教師ハ全任御與へ相成候共是迄私共之通司農局其他諸役
々々引合掛合等ヲ決而彼より致モ間敷と存候若好モてい
たハ候ハ、此困難ある小節瑣事ニ一驚いたハ怒候歟或ハ
恐怖いたハ可申候彼ヲ見る所ヲ日本海軍として盛大ニい
たハ候世話仕候積ニ有之然ルニ海軍從事之諸官とても皆
日々之瑣事あらてハ御奉公之道無之是等ヲ俗事ト擲候ハ
下々之者大迷惑或ハ申上建白等一も御採用有之間敷
御國人ニ候へハ此等の事ニも堪忍ハ勉勵もいたハ候もの
ニ有之若ハや他邦人ニ一日も勤させ候ハ、驚入可申也必

然必らハ海軍之隆盛何れ之年ハ候哉其目的相立申間敷と
存候

此故ハ若哉内外之事件迄御委任御座候ともとても彼勤め
申間敷憤ヲ發して歸國可致候

但英官ハ相並ハ海軍之内事取扱候者ハ才幹周密大小
之道理ニ明ニ且ハ當時之大勢ヲ明察いたハ候程之者
あらてハ御用立申間敷御人撰之上別段御扱擢被仰付
候方歟

一帆前船ニ而運轉方教示以多ハ候ハ、差掛り船々索具并帆
も大破いたハ居候哉否取調悉く丈夫ニ仕直ハ且部屋向も
塗直ハ手入等いたハ不申候てハ御用立申間敷一運轉い
候へハ索具も損所出來候事既ニ長崎表ニ而現ハ試居候

或る大砲も乗せ不申候てハ砲術之稽古如何哉乍去砲術之教師如何いたし候哉唯今より取極メ難ク其心積を致置不申候て臨時ニ差支可申と存候

一傳習生之多寡ニ應一御手當御賄も不被下候て相願候者も有之間敷是等も其人數ニ相應候事故預メ目算いたし置き度事

一金川ニ帆前船滯泊いたし教師も其船之方専らに候ハ、總裁并奉行衆も時々御見廻及ヒ御尋問も可有御座其節を陸ニ候ハ、無論海上ニ候ハ、千代田形并蟠龍之兩船を以て右之御用ニ當て置候義と存候帆前船ふて遠洋ニ乗出候様相成候ハ、其場所ニ寄り上陸も可致候間右等も豫メ御配慮之事

一萬一英教師從來之軍艦組諸共新生徒教育いたし候義ニ候ハ、尤可然事と存候其故を海軍之業を海上ふて船々取扱大砲打發推歩を以て其思ふ處ニ違し候外より術無之何れ之國ニ候とも其術同一ふて精粗巧拙或ハ船艦之員數多寡有之候而已英國ニ候とも別ニ是より術を無之唯今迄之軍艦組とても其術巧ニ仕候者を殆ど西洋人ニ譲らざる程之者有之乍然蘭傳習之者故御採用ニも不相成別ニ新生徒へ英人傳習之御心組相成候事ふて其流義ニ相反候而已ふて御用立候程之者別ニ一纏メ御集是年少新ニ御募り相成候を舊者之剛情緩御之面倒あると海軍技之世間ニ明らうあらさるとの故ニも候哉若軍艦役も同一乗組候ハ、初メを其流義并其器之各目違ひふて不都合之様ある儀と可存候

得共其詰り教意受繼候方尤速く可有之英語相學ひ不申候
てを世界に乘出候時不都合と申事ハ軍艦組を誰ヤも存罷
在候事ニ而孰も教師に附屬被仰付候共異存申候者有之間
敷用材有之を捨て小材をのこし其用ニ充て可申と存候ハ
尤迂遠之事と存候

此程被仰出之諸御規則先ツ右ニ御定メ之上を強て彼是申
候ニを無之候得共英教師來着之上を少く宛之御變革を出
來可申兼而一同相心得居不申候てハ内々之小議論も生
可申哉何事も海軍を教師に御相談之上御定メ可然權彼ニ
在て我ニあらむ此御方ふて小節目論候とも彼り一言も破
を候様よてを下く迷惑而已と存候事

是ヨリシテ追々ニ傳習掛命セラレシ者姓名如左

海軍奉行並

服部長門守

軍艦奉行

赤松播磨守

軍艦頭並

伴鐵太郎

同年五月五日英國公使海軍所ニ來り傳習教師寄寓ス可キ居
所ノ商議アリ同月十一日高輪接遇所ニ於テ英國公使ニ應接
ス十三日同如來寺境内英國騎兵居所ノ半ハヲ以テ元海軍所
内へ引移シ教師假居館ニ充ツ可キ旨ヲ答フ十九日英國公使
閣老井上河内守方へ到り蘭人雇入之儀ニ付發論セリ廿一日
右件ニ付英國公使議スル所ハ既ニ海軍之傳習英國へ托セラ

レ近日教師渡來ス可シ然ルニ一應之話次ニモ及ハスシテ荷
蘭國ノ海軍士官雇入レラル、ハ其意ヲ得ス定メシ教師到ル
モ此ニ止マル可カラス又大阪ニテ懇々依頼アリシニ今當地
ニテ如此ハ我ノ解セサル所ナリト此日稻葉兵部大輔井上河
内守小笠原圖書頭并役々出席ナリシカ彼更ニ辨解ヲ聽カス
故ニ蘭人雇入之事斷リニ及フ可シト云フニ決ス廿六日蘭人
雇入之義斷リ申ス可シ且ツ時機ニ因リ我ヲ荷蘭國へ派遣セ
ラル可ク故右之心得ヲ以テ可談判旨兵部大輔ヨリ沙汰アリ
翌日右件ニ付我意見及ヒ談判之趣旨ヲ小栗上野介へ面話セ
シ處同人亦我意ト符合ス六月十一日荷蘭國公使館ニ行キ全
國傳習士官斷リノ事ヲ談判セシ處大ニ好都合ニシテ彼之ヲ
承諾ス八月十五日英國公使并海軍都督濱海軍所へ來ル廿一

日英國公使へ教師住居之地ヲ談判スルニ江戸へ寄宿スルハ
不宜神奈川辨天近傍へ引ク可シト言ヘリ廿三日英國公使へ
引合ヒ先日報答セシ如ク寄寓所復舊ノ説ヲ述フ九月廿七日
英國海軍教師兩人橫濱着港之旨全國公使ヨリ來翰翌朝伴鐵
太郎へ命セラレ橫濱ニ至リ着港之教師ニ面會シ來着之賀詞
ヲ述ヘシム廿九日我及ヒ土岐肥前守爲教頭尋問橫濱へ出張
シ十月朔日教頭トレシ―并教師士官ウイルソンへ面會來着
ヲ祝ス三日英國公使館へ行キ教師ノ手續ヲ相談ス六日英國
教師トレシ―ウイルソン下等士官二人傳習所舊海軍所築地
原町三ノ橋脇元小田寄宿所へ引移ル七日教頭へ濱ニ於テ變應ス
ト松平安藝守邸
十六日英國教師士官二人下士官二人水卒四人橫濱ヨリ到ル
トレシイへ引渡ス教頭其他姓名如左

準艦長 ル、エ、トレシイ

砲術方士官 ア、カ、ウ、イルソン

測量方 シ、セ、グラント

機関方同 ガ、ロブソン

砲卒長 ガ、ゼー、ムス

水夫長 ト、フランドン

水卒等 六名

總計拾貳名ノ者英國總督船「ロデネ」號ニ搭載シ來ル

傳習所地内へ更ニ教場及ヒ生徒室等ヲ造築シ大ニ年少子

弟ヲ募集シ盛大ニ及ハントス此ニ關スル役々如左被命

生徒取締 鵜殿團次郎

同十一月初開成所へ轉任 原田吾一

通辨掛頭取十一月末ヨリ 何令之助

生徒取締兼勤 柴田大介

同 柳谷謙太郎

十一月初ヨリ軍艦役 生徒取締兼勤 塚本桓輔

同同月末ヨリ 甲賀源吾

翻譯掛頭取 蘭鑑三郎

翻譯掛 山本譽五郎

通辨掛 古谷作左衛門

同 松波權之助

調役組頭 永井金之助

外 調役同下役

若干名

生徒八十名内卓長四人

廿一日英國公使館へ兵部大輔肥後守行キ教師給料等之事ヲ議決ス教師ハ二ケ年ノ期限ニシテ此教頭ハ官位陸軍メヂヨールニ當レリ故ニ佛人陸軍教師シヤノワシヨリ重ク用ユヘキナリト云廿二日英國公使へ給料其他之事件引合但佛人之例ニ倣フ

佛郎西傳習教師俸給

總督上等壹ヶ月	金三百七十五兩
上等士官	金貳百五十兩
下等士官	金八十七兩貳分

英國人海軍傳習教師月給

甲比丹トレンシイ	金三百七十五兩
士官三人	金貳百五十兩ツ、

水夫頭
大砲頭

金八十七兩貳分ツ、

大砲方貳人

金六十貳兩貳分ツ、

外四人

金五十兩ツ、

一月給者翌月ノ一日ニ相渡候事

一教師貳ケ年限リ解雇相成候而者迷惑之事

一食料ハ自分賄之事

一小道具者取纏メ差出ト後者自分ニ而調達之事

一小遣之者之給料者自分より差出之事

一旅費者給料之半額相渡候事

一火輪船及船賃船中之食料とも都而日本政府ニ而相拂候

事

同月廿三日英教師へ此度被仰渡之大意ヲ告ク是ハ兵部大輔

之口上ヲ達スルナリ十一月朔日「キリストマス」ニ付四日迄
休業五日月曜日ヨリ稽古始ル十三日英國教師航海之入費
及ヒ給金等ノ書附ヲ差越ス其文ヲ和解スルニ

香港ヨリ横濱迄飛脚船賃

上等士官四人洋銀貳百枚、
外八人同百枚、

合千六百枚

本國ヨリ香港迄之給料并諸入用

五千四百七十七枚六十二セント

稽古用書籍其外

五百廿ポント拾七シユルリンヅ

同月廿一日軍艦組傳習志願之者一同教師へ引合ス廿二日教
師授業之時限其他規則之事相談之上定ム

慶應三年丁卯十二月七日入寮生徒總員七十一人

生徒修業時限

朝第七時

臥床ヲ離

- 朝第八時前十五分 面部手足ヲ洗
- 朝第八時前 各部屋前ニ整列
- 朝第八時 朝飯
- 朝第九時前三分 稽古所ニ出
- 朝第九時 稽古ヲ始
- 朝第十時半ヨリ十分ノ間 逍遙運動
- 朝第十一時前二十分 稽古ヲ始
- 朝第十一時半 稽古ヲ終
- 朝第十二時 午飯
- 夕第一時前三分 稽古所ニ出
- 夕第一時 稽古ヲ始
- 夕第二時半ヨリ十分ノ間 逍遙運動

夕第三時前二十分 稽古ヲ始
 夕第四時 稽古止
 夕第六時 晚飯
 夕第十時 燈火ヲ滅臥床ニ就

慶應三年丁卯十月英海軍教師傳習學科

日課

火曜日	同	測二量士官	砲術士官	第一生徒	砲術士官	測一量士官	第一生徒	生徒	運用術	砲術	腰刀術	航海術
月曜日	晝後	測二量士官	砲術士官	第一生徒	砲術士官	測一量士官	第一生徒	生徒	砲術	砲術	腰刀術	航海術
日曜日	晝前	測二量士官	砲術士官	第一生徒	砲術士官	測一量士官	第一生徒	生徒	砲術	砲術	腰刀術	航海術

艦上演習

水曜日	同	測一量士官	砲術士官	第一生徒	砲術士官	測一量士官	第一生徒	生徒	砲術	砲術	腰刀術	航海術
木曜日	同	測二量士官	砲術士官	第一生徒	砲術士官	測一量士官	第一生徒	生徒	砲術	砲術	腰刀術	航海術
金曜日	同	測二量士官	砲術士官	第一生徒	砲術士官	測一量士官	第一生徒	生徒	砲術	砲術	腰刀術	航海術
土曜日	同	測二量士官	砲術士官	第一生徒	砲術士官	測一量士官	第一生徒	生徒	砲術	砲術	腰刀術	航海術

生徒運用修業ノ日者第一第二生徒ハ英語算術ノ教ヲ日本教師ヨリ受ヘキ事
 若シ水曜日雨天ノ節ハ來日ノ學科ト易ヘキ事

一大砲號令ハ日本語ニ可改事

一濱局ノ道具拂代ヲ以テヘボン辭書買上ヘキ事

但同辭書壹部十二ドルヲル百五十部買上之事

一安宅ノ船倉壹棟傳習所地内ヘ引キ稽古場ニ建直シ普請之事

一濱ノ土藏一戸前器械所ニ模様替ヘ致スヘキ事

一別手組護衛之事

日本士官教導之仕様

一生徒 拾貳人

一軍艦組 六人

右者從來英語算術能ク出來候者相撰航海運用術教導可

致候

一生徒 三拾人

一軍艦組 拾四人

右者砲術運用術教導可致候

一生徒 拾貳人

一軍艦組 拾人

右者蒸氣機關而已教導可致候

自餘之生徒ハ貴國之教授方ニ於テ英語算術之修業而已有之候様致一度尤一七日ニ兩日程運用術腰刀術之教導可致候

一千代田形ハ御用無之節者當學校ニ繋置右船ニ於テ日々運用機關之教導可致候